

井上円了研究序説

——妖怪博士の奇想——

連載第二回

明治20年の「建国」宣言

中島敬介

1. 井上円了の生涯——明治21年（1888）年までに重点を置いて

《円了の多様な相貌》

井上円了は明治期の著名人としては異例なことに——2種類の履歴書と信仰の来歴の「告白」を除き——「自伝」を残していない。「われは伝なきをもって伝となす」を主義としたからだだが、その考え方が他者にまで影響したのか、長く詳細な評伝も書かれてこなかった。

以下、先に触れた履歴書・来歴に加え先行研究を参考に円了の生涯を略述し、これを踏まえて考察を進めていくが、いま述べたことと関わってお断りしておかなければならないことがある。それは、円了が私学の創立者（学校教育）／修身教会の創始者（社会教育）／哲学の普及者／宗教思想家／「妖怪博士」といったさまざまな相貌を持っていて、どの相貌の円了を念頭に置くかによって描く生涯の明部と暗部が違ってしまふ、ということだ。例えば、同じ明治19年（1886）の円了でも、「妖怪博士」の円了なら「不思議研究会」の発足に光を当てたくなるだろうし、宗教思想家の円了なら

「北越戦争」が起こり、城下町・長岡は維新政府軍によって焼き払われて50%。

翌年4月に石黒の塾が閉鎖されると、明治5年（1872）12月までの3年間、生家・慈光寺に設けられた学校（校長は長岡藩の儒者であった木村鈍叟）で、漢学と初歩的な英文を学んだ。この期間中の明治4年（1871）に出家得度している。

明治6年（1873）「高山楽群社」という英語学校で学んだ後、翌7年5月「新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）」に入学、本格的に英語を学修した。明治9年（1876）7月に卒業するが、その後も学校に残り数学と漢学を教える立場となった。

明治10年（1877）6月、19歳の円了は本山（東本願寺）から至急上洛の招集命令を受ける。9月に教団のエリート育成方針に基づき、教員養成のために設置された教師教校（英学科）に進学する。明治11年（1878）3月に教団の留学生として上京、9月に東京大学予備門に入学した。本山での在学期間はわずか半年余であった。このあたりの経緯は公的な記録がなく詳らかではないが、本山を代表する東京留学となったのは、円了の学力や将来性を高く評価する教官たちの推薦によるものと考えられている。予備門への入学は当時東京大学法理文学部総理であった加藤弘への勧めがあったとも言える。

《大学時代から最初の外遊まで（1878—1888）》

明治14年（1881）、予備門を首席（に近い成績）で卒業した円了は、東京大学（文学部哲学科）に入学。西洋哲学・論理学をフェノロサ、東洋哲学・史学を井上哲次郎、印度哲学を原坦山、漢文学を中村正直から学ぶなどして、明治18年（1885）7月に卒業。10月の学位授与式では総代

着目すれば『真理金針』の出版がより重要と感じられるだろう。

本稿は「国家プランナー」とでも言うべき円了に注目していることから、このあと描く円了の生涯もその観点から陰影がつけられることになる。自分の見立てには自信を持っているが、従来とは異なる円了像に違和感を抱く向きもあるかもしれない。予め留意をお願いしたい。

《出生から大学入学まで（1858—1878）》

井上円了は安政5年（1858）、現在の新潟県長岡市浦に、父・円悟と母・イクの長男として生まれた。生家は代々続いた真宗寺院（浄土真宗大谷派東本願寺末寺の慈光寺）で、母の実家も真宗寺院（栄行寺）であった。旧幕時代の10歳までの円了は「候補衆徒」（次期後継予定者）として、住職になるための宗門教育を施された。

明治元年（1868）3月から、尊皇思想家で洋（医）学者・石黒忠憲（1845—1941）の私塾で漢学・西洋数学を学んだ。この年の9月、となっている。卒業後は東京大学研究生に選抜（7月）、教団からは印度哲学取調掛に任命された（9月）。
大学時代の円了は、入学の年から教団機関誌や大学の学術雑誌に積極的に論文を発表し、また哲学会の創立（1884）を主導し、卒業の年には哲学祭を興し、最初の単行本『破邪新論』も出版している。卒業前年の明治17年（1884）、4年生になったばかりの円了は清沢満之ら教団からの留学生5人との連名で、後の私立学校「哲学館」の創設につながる内容の上申書を本山に提出している。

明治19年（1886）、帝国大学大学院への入学を申しつけられるが、病気を理由に辞退し、熱海で長期療養することになる。すでに文部省への出仕も、教団から命じられた教職に就くことも固辞していた円了は、明治20年（1887）、哲学専修の私立学校「哲学館」を創設する。

同じく明治20年ごろから、日本（国粋）主義結社「政教社」の創設に加わり、「護国愛理」を叫ぶようになる。僧籍は残したままだが、教団から離れていた円了は、半僧半俗の立場から日本仏教（正しくは僧侶）の頹廃を嘆き、政教社の機関誌『日本人』に掲載した「日本宗教論」で、仏教哲学の優位性を高唱するとともに、返す刀でキリスト教の教義を全否定していった。

その一方で、哲学館創設のわずか半年後の明治21年（1888）6月、突如として欧米の宗教・教育事情の——一年余に及ぶ——視察に出发し、旅先から「坐なからにして国を富ますの秘法」と題する「奇妙」な論考を『日本人』に寄稿した。連載途上の「日本宗教論」を中絶してまで。

帰国後は、創設したばかりの哲学館について「将来目的」などに関する意見書を、矢継ぎ早に発表した。

《帰国後の動向（1881—1919）》

円了の世界旅行は、最初の明治21年（1888）を含め生涯二度に及び、南半球から北極近辺までを踏破して国際的見聞を広めた。

明治26年（1893）に妖怪学を創始し、世間の迷信打破に励み、「妖怪博士」・「お化け博士」と呼ばれるようになる。

公的には、明治33年（1900）、文部省の修身教科書調査委員となり、翌34年（1901）には私学校経営者の代表として内閣直属の高等教育会議議員を委嘱された。

明治35年、二度目の外遊中に勃発した「哲学館事件」によって精神疲労に陥り、明治39年（1906）、「独力経営二十年」の学校教育から身を退く。関係する全財産を大学に寄付すると、明治37年（1904）に開いた「哲豆亭」を拠点とする社会教育活動に転じ、後半生を費やして「全国巡講」に邁進する。

生涯で182冊の自著（述）と857編の論説を世に送り、また27年間にわたって全国くまなく——農山漁村を中心に——津々浦々を巡り、延べ7000回を超える講演を行った。

大正8年（1919）、中国・大連での講演中に昏倒、意識が戻らないまま現地で客死した。

円了は政府からの「表彰」を——一度ならず——拒絶し、権力に近づかず、生涯にわたって無位無冠を貫いた。また生前に遺言状をつくり、香典も謝絶し、心血注いだ哲学堂の「私有」も禁じ、私財のほとんどは遺族によって公の機関に寄附された。円了の遺言どおりに。

以上、ざっと駆け足で円了の生涯をトレースした。社会的名声や蓄財

に関心を向けず、政府や政治権力とは一定の距離を置いていた姿が垣間見える。あらためて明治21年あたりまでの円了の立ち位置を整理すると、次のような変遷が確認できる。

- (1) 生家である寺院の跡継ぎ
- (2) 仏教復興を悲願とする教団のエリート
- (3) 哲学をはじめ最先端の学問を習得する学修者
- (4) 近代日本（人）を憂える知識人

さらに、(4)の立場の円了を支え続けた基本理念「護国愛理」は変わらなないものの、明治21年（1888）の欧米視察の前後では、日本（人）への向き合い方に、顕著な違いが現れているようだ。

次章では、まず生涯不変のコンセプトである「護国愛理」を見ていくことにしたい。

2. 「護国愛理」という理念

《明治20年の「建国宣言」》

「護国愛理」の語は、明治20年（1887）出版の『仏教活論序論』（以下『序論』）に初めて登場する。この『序論』には「護国愛理」というコンセプトが明記されているばかりか、前号で触れた「通俗化と実践」の母型も「中道の理」を保持する「方便」として記されている（p.64）。また「妖怪学」の真怪の「正体」も顔を覗かせており、まさに円了思想の「原点」と言える。同時に一方で、円了への誤解の根源でもある。この書を、宗教関連とりわけ仏教復興のための仏教論と限定的に捉える限り、今後

どれほどの研究を重ねようと円了の思想や行動の本質や真意は——その限界も含めて——捉え損なうことになるだろう。

円了は『序論』を次のような言葉で始めている。

人誰か生れて国家を思はざるものあらんや人誰か学んで真理を愛せざるものあらんや（p.1）

この「護国愛理」宣言のごとき文言に続けて、

護国愛理は一にして二ならず真理を愛するの情を離れて別に護国の念あるにあらず国家を護するの念を離れて別に愛理の情あるにあらず（p.3）

護国と愛理は別個ではなく一つのものの表裏だと言ひ、さらに次のように真理と一致させる。

其真理を愛するの本心は護国の一念に外ならざるを以て余が真理の為に喋々するもの皆護国の精神の溢れて外に流るゝものゝみ（p.4）

こうして「真理」＝「護国」＝「愛理」の図式を完成させた円了は、一気にコンセプトの仕上げにかかる。

宗教は其目的古今上下億方の人をして盡く一味同感の樂地に住せしめんとするにあるを以て確然不動一定不変の真理を主唱するものなり「……」宗教に立つる所の真理は東西古今不変不易なりと確定するものなり「……」余か数十年來刻苦して渴望したる真理は「……」独り泰西講するところの哲学中にありて存するを知る「……」已に哲学界内に真理の明月を発見して更に顧て他の旧来の諸教を見るに「……」独り仏教に至りてはその説大に哲理

に合するを見る「……」何ぞ知らん欧州数千年来実究して得たる所の真理早く已に東洋三千年前の太古にありて備はる。（p.11、p.18-19）

《護国と「仏教」の復権》

円了の言い分は、こうである。宗教とは「不変の真理」を主唱するものだが、自分は西洋哲学の中にか真理を見いだせなかった。しかし真理の発見後、あらためて諸宗教を探ってみると、仏教だけは西洋哲学に合致していると判明した。西洋が数千年かけて手に入れた真理を、既にアジアは3000年前に獲得していた。つまり、宗教と言ひ得るのは「真理」（「護国愛理」）を主唱するものだけだとすれば、諸宗教中、唯一「護国愛理」（「真理」）を内包するものは仏教であるから、宗教と言ひて良いのは、仏教だけなのである。

円了の「仏教」重視は、それが「真理」の唯一にして不可分の「乗り物」であるからだ。仏教の復権はあくまでも真理を明らかにするための手法であって、それ自体を目的とするものではなかった。そして「護国愛理」を終生のモットオとしたのも、それが「真理」の咀嚼された「内実」であるからだ。円了にとつて、「宗教仏教護国愛理真理」の10文字は、分かちがたく結びついていた。「護国」の部分だけを切り取って、円了をいわゆるナショナリストやショーヴィニストなどと評するのはほとんど「的外れ」である。

では、「余も微力と雖も一死もって護国愛理に盡さんと欲する」（p.24）とまで円了を追い込んだ、その「真理」追究の目的とは何か。円了は続けて言う。

宗教の真理を学海に開発し東洋人の先に立ちて国家の独立を世界に公布せんことを熱望するものなり（p.29）

宗教——すなわち仏教——の「真理」を学問的に明らかにし、東洋諸国初の独立国家となること、これこそ「護国愛理」の目的だと明かし、しかもこの両二者は一体不離の同義だとするのである。

《明治35年の「維新大号令」》

だが、『序論』出版の時点において、すでにこの国の「独立」は果たされていたのではなかったか。狭義に見ても、明治維新によって「明治新政府以後鎖国孤立の態度を一擲して開国進取の政策樹立し世界諸国との情誼を敦く」し、広義には「抑も我が国の外交と交通するや其の起源素より遠く其の内外に及ぼし」ていたはずだ。そもそも神武肇国以来の「独立国家」が、この国の自己規定であった（注）。その認識に立てば、この上「国家の独立を〔…〕熱望」する理由はないはずだ。円了の真意が、ただ対外交渉の案件に過ぎない「不平等条約」の改正にとどまっていたとは思えない。「不変の真理」まで持ち出すには、それに見合う大義がなければならぬ。逆に「不変の真理」といった大原則が、切った張ったに近い条約改正交渉に、実効的威力を発揮すると考えるほど、円了はナイーブでもなかったはずだ。後の「明治二十五年を迎える辞」（『雨水論集』所収、以下「辞」）で、円了は次のように述べている。

明治維新の大業は明治初年に於て其三分一を完成し、二十年三十年に於て其三分二を結了し、愈々之を大成するの日は四十年五十年の後をまたざるべからず（p.2）

この一文を『序論』の「国家の独立を世界に公布せん」という言葉に接続

追究のツールは『序論』での「仏教改良」から「妖怪学講義」にシフトしていったのである。仏教は明治18年（1885）以来「日夜ほとんど全く精神を安んずること」（『序論』p.355）く奮闘したものの、どうにも使い勝手が悪かったようである。

明治20年に発出された「建国宣言」（『序論』）は、明治26年の「ロードマップ」（『緒言』）で実施手順が示された。やがて「大号令」（「辞」）に基づいて、後——明治35年——に規定される「主権者」が本格的な国家づくりを進めるまで、円了にはやるべきことが残っていた。

近代日本にふさわしい経済基盤を確立するための「富国策」のプランニングである。

（次回へつづく）

すれば、円了が為そうとしたことは、「明治維新の完成」であったことになる。この「辞」から読み取れる、その「完成」のニュアンスは「未完の決着」というよりも「不全の是正」に近い。円了にとって、明治維新——政府——による近代国家・日本の建設のあり様は、満足すべきものではなかったのである。

明治20年の国家独立「護国愛理」宣言が、明治35年の「辞」による「明治維新完成」に向けた行動開始の「大号令」につながっていたとすれば、この15年の期間のうちに、目指すべき「国家構想」——換言すれば、明治政府が目指す国家像への不満——とその「実現行程表（ロードマップ）」が示されていなければならない。

《明治26年の「ロードマップ」》

『序論』から6年後の明治26年（1893）、円了は『妖怪学講義緒言』（以下『緒言』）を出版し、次のように述べていた。

先きに妖怪研究に着手し次に哲学館を創立し次に専門科開設を発表し今又妖怪学講義を世上に公にするは皆護国愛理の二大目的を履行せんとするものに外ならず〔…〕余將に言はんとす妖怪学は宗教に入るの門路にして教育を進むるの前駆なりと宗教〔…〕も一たひ妖怪学によりて妖怪の迷雲を掃ひ去て後信念得道すべく教育の所謂智育德育も一たひ妖怪学によりて真怪の明月を開き来て後開發養成すへし（p.33-p.35）

哲学館も妖怪学も「護国愛理」を實行する——真理を實現する——ためだと言ひ、とりわけ妖怪学が宗教や教育に先駆して実施すべきものと位置づけられている。欧米視察後の明治26年（1893）時点において、真理

（注）

外務省調査部編纂『大日本外交文書 第一巻第一冊（1936／昭和11）』日本国際協会、p.4

主な参考文献

1. 井上円了『仏教活論序論』（1887／明治20）秀英舎
2. 井上円了『雨水論集』（1902／明治35）博文館
3. 井上円了『妖怪学講義緒言』（1893／明治26）哲学館
4. 三浦節夫『井上円了』（2016）教育評論社



なかじま・けいすけ
奈良県立大学ユーラシア研究センター特任准教授／副センター長。主な著作として、『勅語玄義』に見る奇妙なナショナルリズム』東洋大学井上円了研究センター編『論集 井上円了』（2019）教育評論社、『地域経営の視点から見た『平城遷都一三〇〇年祭』』『都市問題研究』第60巻11号（2008）、『もう一つの観光資源論』『日本観光研究学会研究発表論文集 No.29』（2014）、『井上円了の国家構想』『東洋大学井上円了研究センター年報 vol.26』（2018）、『南貞助論—日本の近代観光政策を發明した男』『日本観光研究学会研究発表論文集 No.34』（2019）など。